みつかる。つながる。よくなっていく。

毎月10日発行　第751号（通巻1255号）

東京YMCA

12
2017年

創立1880年
〒135-0016
東京都江東区東陽2-2-20
Tel 03-3615-5562
URL http://tokyo.ymca.or.jp
発行所　公益財団法人
東京ＹＭＣＡ
発行人　菅谷 淳

東京ＹＭＣＡの使命　東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

「社会に向かい　声をあげる」

世界ＹＭＣＡ／ＹＷＣＡ合同祈祷週　2017年テーマ「立ち上がり、思い切って言いなさい。― 抑圧され、差別された人々の声を」

ＹＭＣＡ・ＹＷＣＡ両会長のメッセージ

―要旨抜粋―

「社会主義者が牢獄に入れられたとき、私は声をあげなかった。私は社会主義者ではなかったから。彼らが労働組合員を攻撃したとき、私は声をあげなかった。私は労働組合員ではなかったから。そのあと、彼らはユダヤ人を連行した。それでも私は意見を言わなかった。私はユダヤ人ではなかったから。そして、彼らが私を攻撃したとき、私のために声をあげる者は、誰一人残っていなかった」。これは、マルティン・ニーメラー牧師（1892-1984）の言葉です。彼は、公然とヒトラーを批判して、ナチス政権が崩壊するまでの7年間、強制収容所に収容されていました。

「正義がない時、中立な態度をとれば、それは圧制者側に立つことを選んだことになる」というツツ大司教の言葉もあります。

私たちは、人種主義やナショナリズム、制度的な排除により、何百万という人々の人権や尊厳が否定されている世界に生きています。（そしてまた）今まで以上に私たちは、ある街や地域で起きたことがすべての人々に影響を及ぼすような、相互につながった世界に生きています。どうやって私たちは世界を変革し、勇気と強い信念をもって、不正に立ち向かうことができるでしょうか。

世界中でＹＷＣＡとＹＭＣＡは、160年以上も活動を続けてきました。これまでにも南アフリカのアパルトヘイト政策や、ベルリン崩壊後に東欧諸国で起きた市民社会の再建運動など、多くの状況下で先頭にたち、社会変革を進めてきました。世界中、多くの地域社会に存在し、青年・女性・信仰が交差する点に立脚しているため、私たちＹＭＣＡ／ＹＷＣＡは他に例を見ないような形で立ち上がり、声をあげ、変革を促進するのです。

この社会的・政治的に不確実な時代にはっきりと、不正や抑圧に対して反対の声をあげ、人権と尊厳を回復させ、遠く離れたコミュニティーにいる、最も被害に陥りやすい子どもたちをエンパワーするために声をあげ、立ち上がるよう、皆さんにお願いします。

世界ＹＷＣＡ会長　　デボラ・トーマス＝オースティン
世界ＹＭＣＡ同盟会長　ピーター・ポスナー

全世界のＹＭＣＡとＹＷＣＡが一つのテーマについて共に考え祈る「合同祈祷週」。今年は11月12～18日、「立ち上がり、思い切って言いなさい。―抑圧や、差別におかれた人々の声を」をテーマに、社会に声をあげることについて考えました。

東京ＹＭＣＡは11月16日、東京ＹＷＣＡ、在日本韓国ＹＭＣＡと共に、社会体育・保育専門学校を会場に祈祷会を実施。約70人が参加し、金迅野（キム・シンヤ）牧師の説教「九人はどこへ行ったのか」に耳を傾け、共に祈りました。

金（キム） 迅野（シンヤ） 牧師

慶応義塾大学卒業後、出版社および行政系財団法人勤務を経て、日本聖書神学校卒業。2012年から在日大韓基督教会横須賀教会牧師。2017年4月設立のマイノリティ宣教センター共同主事。

説教

「九人はどこへ行ったのか」

聖書「ルカによる福音書」17章11～19節には、重い皮膚病、つまりハンセン氏病の方が10人登場します。彼らは村へ来たイエスに対し「遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて」「私たちを憐れんでください」と言いました。当時ハンセン氏病は社会から隔離されていたため、彼らはイエスに近寄ることもできなかったのだろうと想像できます。

現代社会でも、差別された人、傷ついた人が声をあげることは、困難なことです。

私は以前、川崎市のこども文化センターに勤めていたのですが、ある時そこに遊びに来ていた一人の子がぽつっとつぶやきました。「お母さんが、生活保護のお金が３６０円しかないって言ってて・・。昨日から何も食べてない」。何度も会ったことのある子でした。何年も前から知っていて、家庭状況も少しは知っていた子でした。でもその子からその声が聴かれるまでに何年も時間がかかりました。

１９９０年代、従軍慰安婦の方が声をあげ始めました。それに対して「なんで今さら？」と言う人もいましたが、思いだすだけで体が震えるほどの暴力を受けた人たちが、そのことを語るのにどれほどのハードルがあることか。かかった時間は、まさにその人が放っておかれ、孤絶といえるほどの状態におかれ続けたことを意味する時間です。その時間が流れる間ずっと、傷は癒されるどころか深さを増すしかなかったのではないかと想像します。

「声」をあげなければ人にも知らされず、「なかったこと」にされてしまうことも起こりえます。残念なことに現にそのように言う人たちもいます。

「ストーカー」という言葉は70年代にはありませんでした。この言葉が生まれるには、最初に誰かが「これは嫌だ」と声をあげたはずです。また、その声を聴いて一緒に声を発した人がいたはずです。そうやってストーカーという言葉ができた。私たちはむやみに他人を代弁できるものではありませんが、一方で傷ついた人の経験が「なかったこと」にさせられないために、当事者が抱える「語りがたさ」を精一杯受け止めながら、「語りがたさをこそ語る」ことが求められる場合もあります。

先ほどの聖書でイエスは、10人のハンセン氏病患者を憐れみ、その病を治しました。この「憐れむ」というギリシャ語は、直訳すると「自分の腸がちぎれるような思いで共感する」です。イエスはそれほどに彼らの痛みを共有し、病を治しました。

けれども病が治り、社会復帰を認められた10人のうち、イエスの所へ戻ってきて感謝したのは１人だけでした。「９人はどこにいるのか」。イエスはどんな思いでこう言ったでしょうか。

イエスは感謝をした１人に「あなたの信仰があなたを救った」と言いました。感謝すること。信仰によって救われるということ。それは重病が治ったときだけに起こることではありません。たとえば友だちができたとき。友だちは、自分で作れるものではありません。たくさんの条件の一つでも欠けたら出会うことはなかった。出会いは普通のことではありません。そこには神の働き（としか言いようのない奇蹟）がある。私たちはそんな一つ一つに気づかず、先の９人と同じように、感謝する喜びを忘れがちですが、そこに気づいた時が、信仰による救いに近づいた瞬間ではないでしょうか。

逆に私たちは辛いとき「なぜ私だけがこんなに辛いのか」と神様を恨んだりします。共に重荷を背負ってくれている方の存在を忘れてしまった私たちの姿です。

声をあげること。それは声を聴く人がいて初めてできることです。私たちはイエスのようにはなれなくても、声をあげられない人に寄り添い、その痛みを共有できる者でありたいと思います。同時に私たちは、良い時にも悪い時にも、その背後にいて私たちの声にならない声を聴き、憐れんでくださる方の存在を覚えて、感謝できる者でありたいと思います。

（まとめ・広報室）

赤▽三角

会員部の中にある小委員会の一つに「ミッション委員会」があります。主に、毎月１日に開催している「早天祈祷会」（12月で８２１回目を迎えた）の運営を行っていますが、今回、東雲コミュニテーセンターにてファミリー向けのクリスマス会を実施し、クリスマスの意味に耳を傾ける機会を設けました▼いまＹＭＣＡは新しいロゴやスローガンを社会に表出し、心新たにブランディングに取り組み始めていますが、その事前調査として行われたアンケートには「ＹＭＣＡは何をしている団体かわからない」「キリスト教の団体にあまり関わりたくない」というような結果もあり、とても寂しく感じました▼東京ＹＭＣＡは東雲地域で乳幼児から高齢者まで幅広い人たちを対象にさまざまな事業を展開しています。「キリストによって示された愛と奉仕の精神」を基盤とするＹＭＣＡとして、キリスト教に触れたことがない方々にも、その良さを具体的に感じることができる場を設けることはとても大切だと思います。これからも、参加して楽しいと感じ、なおかつキリスト教の隣人愛を感じられるような、魅力的な場を創り出していきたいと思っています。

（会員部　小松康広）

シリーズ
資料室の窓から〈100〉
『すごい仲間たち』
本会元副総主事　齊藤　實

「資料室の窓から」１００回記念号

86年開催の、若手音楽家を励ます「ＹＭＣＡコンサートすごい仲間たち」に出演したヴァイオリニスト諏訪内晶子さん当時14歳（＝写真下、前列中央）と主催者たち

写真を２枚掲げた。１９８６年４月５日、神田美土代町の東京ＹＭＣＡ会館少年部ロビーでのものである。この日、東京北ワイズメンズクラブが実務を担当していた「ＹＭＣＡコンサートすごい仲間たち」が、諏訪内晶子さんを招いてヴァイオリンの演奏を聴いた。東京北クラブでは、ワイズメンズクラブ本来の使命である「ＹＭＣＡ活動を支える」働きの一つとして、「若手音楽家を励ます試み」を選んでいた。その第７回で、前の年１９８５年に全日本学生音楽コンクール中学生の部で第１位となった彼女を招いた。集合写真の前列中央に立つ白い服が14歳になったばかりの「演奏家の卵・諏訪内晶子」である。翌年に日本音楽コンクールで第１位。更に１９９０年には、チャイコフスキー国際コンクールで第１位となった。最年少で、しかも日本人初の快挙である。同時にバッハ作品最優秀演奏者賞とチャイコフスキー作品最優秀演奏者賞をも受賞している。東京ＹＭＣＡが「この子こそ」と選んだ「演奏家の卵」が立派に孵化して世界的演奏家となった。

この試みの第13回は１９８９年１月21日に上野の東京藝術大学奏楽堂（当時は「台東区立旧音楽学校奏楽堂ホール」）を会場とした。第41回全日本学生音楽コンクールでヴァイオリン部門高校生の部第１位の佐々木末、ピアノ部門中学生の部第１位佐藤勝重、ピアノ部門小学生東日本第１位の大西真由子の３人の演奏を１９０人で聴いた。演奏家の「卵」の選定には、音楽鑑賞教育振興会の知恵をいただいた。東京ＹＭＣＡは、こうした専門家集団との連携によって「その世界での〝すごい仲間たち〟」に、羽ばたく機会を提供していたのであった。諏訪内晶子の例を、東京ＹＭＣＡ活動の一つの側面として記憶したい。

しかし、東京ＹＭＣＡの場合、「その人の名」が世に響き渡るときに限って「すごい仲間たち」なのだ、と云うのではない。共々に支え合い、楽しみを分かち合う仲間であり続ける。そのかたちを指してこそ、「すごい仲間たち」というべきなのだ。つまり、これが東京ＹＭＣＡ会員活動の「いいところ」なのである。東京ＹＭＣＡがその歴史をとおして相共に「すごい仲間たち」に成り合う群れであり続けて、今は２０１７年12月である。会員活動の１３７年目を締めくくる歳末を迎えた。連載第百話となったこの「資料室の窓から」に登場した人びとは皆、「すごい仲間」であった。その輪の中にいる私は今卒寿。会員生活71年。これからも私の「すごい仲間たち」は加わり続く。共にＹＭＣＡを生きるすべての道が素晴らしい仲間たちになり合う大事な装置なのだと思う。チャリティーランで駆ける、水泳大会で泳ぐ、バザーで立ち働く。そのあなたこそ、すごい仲間たちのひとりなのだ。

ＹＭＣＡ史学会20周年

歴史に学び、未来を創る

⇒ＹＭＣＡ史学会理事長の齊藤實氏

１９９６年から活動している「ＹＭＣＡ史学会」が創立20周年を迎えた。当初は十数人ほどで、50年代に編集された『日本ＹＭＣＡ史』を学び直す作業から始め、２００３年にはこれに戦後史を加えて全約６５０頁におよぶ『新編日本ＹＭＣＡ史』を出版した。現在は、退職主事やＹＭＣＡ会員など80人と10カ所のＹＭＣＡが登録。東京ＹＭＣＡ資料室を活動拠点とし、年に４回、例会を開催して研究発表を行い、それを会報にまとめて発行している。会員がそれぞれの専門分野を研究して発表しているためテーマは多岐にわたり、たとえば「新渡戸稲造とＹＭＣＡ」「学生ＹＭＣＡ寮における戦時の証言と継承」「沖縄ＹＭＣＡ55年の歩み」など、人物から事業・活動の研究まで、さまざまな視点からＹＭＣＡの働きを検証し、語り継いでいる。

11月９日には、在日本韓国ＹＭＣＡ（千代田区）を会場に「創立20周年記念特別例会」が開催され、全国の会員50人が集った。会の最初に行われた礼拝では、会員で牧師の上林順一郎氏（日本キリスト教団江古田教会）から「バック・トゥ・ザ・フューチャー」と題して説教があった。上林氏は、聖書「詩篇」１４３篇にある「いにしえの日々」、つまり「過去」を表す言葉の原文を直訳すると「目の前にある日」であることを紹介し、「人は過去という〝見える出来事〟を見ながら、まだ見えない未来に向かって進んでいく、いわば後ろ向きにボートを漕ぐような歴史観がイスラエルにはある」と説明。「歴史は単に過去の出来事ではない。私たちは過去に学ぶことで未来を創り出す」と説いた。

第二部は、ＹＭＣＡ史学会理事長・齊藤實氏が「ＹＭＣＡを学び直して20年」と題して講演した。齊藤氏は史学会の発起人メンバーであり、また96年以降毎週欠かさずにボランティアとして、東京ＹＭＣＡ資料室の史資料整理作業を続けている。本紙に掲載しているコラム「資料室の窓」も、今回で１００号となった。

齊藤氏は、90歳を迎えた自身の半生を振り返り、18歳で終戦を迎えるまではＹＭＣＡのことも知らない「大日本帝国」の軍国少年であり、現在の民主的な「日本国」とはまったく異なる国を生きたと言う。東京ＹＭＣＡの歴史も、１８８０年の設立から終戦までの65年間と、１９４５年以降現在に至る72年間とは異なるものとして考えるべきと指摘した。

用意された年表は、１８７８年、つまり東京ＹＭＣＡ創立の２年前、陸軍が参謀本部を内閣から独立した機関として設けた年を始まりとし、以後ひたすらに戦争へと突き進んでいった大日本帝国の動きと、その間のＹＭＣＡの動きを並べて記載。戦時のＹＭＣＡの会員綱領には、天皇に忠誠を尽くす「臣民」としての会員像が描かれていたことや、１９３７年に国家精神総動員令が施行され、非常時局を迎えた際にもＹＭＣＡはそれに従ったことなど、大日本帝国の中で歩んできた歴史について言及した。

何より齊藤氏は「今また戦前に回帰するかのような国政の中で、ＹＭＣＡが再び、他団体との協力などと称し、政治が求めるままに国民教化の最前線を走っていくことのないように。ＹＭＣＡの基本はキリスト教であり、その実践のために存在している民間の自立した団体であることをしっかり見据えるべき」と警鐘を鳴らした。同時に、継承すべきもの、すべきでないものを見極める判断力をつけるためにも、歴史を学び直すことが重要と、史学会の抱負を語った。（文・広報室）

総主事カフェ

東京ＹＭＣＡ総主事　菅谷　淳

総主事カフェにようこそ

皆さん、クリスマスツリーにかかっている金色と銀色の糸（モールと言います）の伝説をご存知ですか。ヘロデ王の手を逃れてエジプトに向かったヨセフとマリヤと幼いイエスは旅の途中、砂漠で夜を過ごすために小さな洞穴に入りました。そこには１匹の蜘蛛がいました。寒い夜、「幼いイエス様が風邪をひかないようにしなければ」と思った蜘蛛は、洞穴の入口いっぱいに蜘蛛の巣を張ったのです。そんなことで寒さをしのげるわけではありませんが、蜘蛛は自分のできることを一生懸命に行いました。真夜中のこと、ヘロデの軍隊が３人を追って来ました。洞窟の前で止まり、隊長が言いました。「中を見て来い」。兵士が馬から下りて洞窟に近づいてきます。絶体絶命です。ところがなかなか中に入ってきません。兵士は言いました。「洞穴の入口に蜘蛛の巣が張っています。誰も中に入った形跡はありません」。「よし行こう」。兵隊たちは去って行きました。洞穴の入口には夜露をいっぱいにたたえた蜘蛛の糸が、月の光を受けて金色に、そして銀色に美しく輝いていました。

これはシリアに伝わる伝説です。ご存知のようにシリアでは内戦が長引き、国民のおよそ半分が家や家族を失って難民となり、国内外に避難しています。ドイツを始め各国は難民の受け入れを行っていますが、各地で排斥運動も激化し多くのシリア難民が傷つき疲れ果てています。出口の見えないこの争いの一番の犠牲者は、女性や子どもなどの一般市民です。シリアの子どもたちが今年のクリスマスをどのように過ごすのかを考えると胸が痛くなります。「遠く離れた私たちがいくらあがいてもどうにもならないよ」「少しくらいの支援は焼け石に水」「シリア独自の問題。関係ない」という人もいるでしょう。

そのような私たちに、洞窟の入口にいた一匹の蜘蛛は大切なメッセージを送ってくれました。それはマザーテレサの二つの言葉に現れています。

「私たちは、この世で大きいことはできません。小さなことを大きな愛をもって行うだけです。」

「もし貧しい人々が飢え死にするとしたら、それは神がその人たちを愛していないからではなく、あなたが、そして私が与えなかったからです。」いつの日か世界中の子どもたちが明るく、暖かく、おいしく、楽しいクリスマスを家族とともに迎えられるようにと、今年のクリスマスのお祈りに加えていただければ幸いです。

■東雲コミュニティーセンター初「にじいろ広場」

学生ボランティアが 乳幼児親子と”運動遊び”

乳幼児親子に思いっきり体を動かして遊んでほしいと、東京ＹＭＣＡ社会体育・保育専門学校スポーツインストラクター科幼児教育ゼミナールの学生たちが、「にじいろ広場」を企画。11月17日の第1回プログラムには、0歳～3歳児の親子8組17人が参加し、学生たちが用意したパネルシアターや自由遊び、サーキット運動などを楽しみました。

学生たちは日ごろの学習成果を活かして一つ一つのプログラムを一生懸命に準備し、当日もかなり緊張して臨みましたが、参加者の楽しそうな様子にほっと一安心だったようです。感想を紹介します。（東雲コミュニティーセンター主任主事補佐　山梨雄一）

【ボランティアリーダー感想】

今回、どのようなプログラムを行えば良いかわからずとても苦労しました。私は幼稚園実習に約１ヶ月行っていたため、そこで学んだことを今回のプログラムに活かしました。実際にやってみて、私たちも楽しむことができたし、子どもたちも楽しそうで、嬉しい気持ちと感動の気持ちが湧き上がって来ました。幼児だけでなく、乳児の子どもたちとも関わりを持てたことはとても勉強になりました。またこのような企画をやりたいと思いました。

田野 勇希（東京ＹＭＣＡ社会体育・保育専門学校 2年）

■江東センター　伊豆大島と今年もサッカー交流

2013年10月、台風26号により甚大な土砂災害に見舞われた伊豆大島。その復興支援活動の一つとして東京ＹＭＣＡは、伊豆大島で唯一の少年サッカーチーム「大島マリンズＦＣ」の子どもたちを、江東区で開催された「第45回ＹＭＣＡワイズカップサッカー大会」に招待しました。もともと「マリンズ」は島内に試合の相手がいなかったこともあり、その後2014年には江東センターサッカーチームの子どもたちが伊豆大島を訪問。2015年には合同チームを作って全国ＹＭＣＡサッカー大会に出場したほか、秋には江東センターのバザーに「マリンズ」が協力するなど、年に1～2回の交流が続いています。

先月11月25日～26日には、江東センターの子どもたち30人が伊豆大島を訪問し、試合や交流会、観光を楽しみました。サッカーができる喜び、感謝と笑顔、そして子どもたちの成長のため、これからもこの交流を大切に続けてまいります。（江東ＹＭＣＡサッカークラブ監督　大原真之介）

■西東京センター　初の「秋まつり」開催

「地域に開かれた大きなプログラムをやりたい」。そんな会員たちの熱意によって11月23日午後、西東京コミュニティーセンターで初めての「ＹＭＣＡ秋まつり」が開催されました。国立市の広報紙などで呼びかけたところ、会場の東京ＹＭＣＡ医療福祉専門学校には、近所のご家族など総勢120人ほどが来場。雨もやみ、秋晴れに恵まれて、子どもから大人まで楽しんでいただける秋まつりとなりました。

初めての試みでしたが、中高生の定例活動グループによるわたあめ、ポップコーン販売、ワイズメンズクラブによる「マルシェ」（採りたて無農薬野菜販売）、茶道体験、お絵かきコーナー、ボランティアリーダーによるゲームやクラフトコーナーの他、バザー、ボイストレーニング、とん汁販売など、バラエティーに富んだブースが勢揃い！　また、障がい者活動のメンバーが働いている施設や、近隣の教会もご協力くださるなど、新しいつながりも生まれました。

おかげさまで売上は約10万円。「ボランティアリーダー養成募金」として、大切に使わせていただきます。ご協力ありがとうございました。

（西東京コミュニティーセンター主任主事　中里敦）

会員・職員が交流「ソシアス2017」

「会員協議会」が 楽しくリニューアル

晴天に恵まれた11月25日、江東コミュニティーセンターを会場に「ソシアス２０１７」を開催しました。「ソシアス」とは仲間のこと。従来は「会員協議会」と呼ばれ、東京ＹＭＣＡの会員が年に一度集まってＹＭＣＡについて学び、グループ協議などを行っていましたが、数年前から参加しやすいよう「ソシアスフォーラム」と名称を変更。今回はさらに会員と職員の親睦の意味を強め「ソシアス２０１７」として実施しました。

まずはＹＭＣＡの新しいロゴマークやブランドコンセプトなどについて学びを深め、その後、参加者49人でバーベキューを行いました。美味しいお肉を囲みながら、広い園庭で話に花を咲かせ、交流を深めました。

「今まで知らなかったスタッフと話せてよかった」「去年までの雰囲気を聞いて緊張して参加したけど楽しかった」などのご意見を聞くことができました。

また現在会員部が中心に進めている「ガガ（イスラエルのドッジボール）」の普及のための体験会では、年齢に関係なく白熱した熱戦が繰り広げられました。

そしてその隣では「ガガ」のピッチコートを新しく作成し、江東ＹＭＣＡ幼稚園にプレゼントするために汗を流す会員、スタッフの姿もありました。

ＹＭＣＡで最初に生まれたブランチである江東コミュニティーセンターの歴史を、湯浅慶・東京ＹＭＣＡ学院長に伺い、先達の思いを胸にしながら館内見学を行った人たちもいました。

思い思いの時間を過ごしながらも、ＹＭＣＡの歴史と今後に触れ、新しい出会いもあった、充実した時間を過ごすことができました。

（会員部　沖利柯）

イスラエルのドッジボール「ガガ」のピッチコートを製作

「ガガ」の楽しさを体験

子育てコラム

いのちの輝き

東京ＹＭＣＡで保育事業に携わる職員を対象に毎年行われている「児童・保育事業全体研修」。普段は日常の業務に追われる保育者たちですが、１日を通してゆっくりと自分の保育を考えることができ、とても有意義な研修となっています。

今年のテーマは〝愛〟でした。この深いテーマについて、まずは各園の実践報告を聞いた後、小グループに分かれ、自分たちの日々の保育を振り返りながら、想いや悩みを共有する時を持ちました。『自分は本当に子どもたちを正しく愛せているのだろうか』と真剣に語る保育者たちの姿を見て、その想いこそが愛なのではないかと素直に感じることができました。

愛は、人それぞれ感じ方も大きさも深さも違うものであり、また目にも見えませんが、自分の保育を振り返り、これでいいのかと悩み、他の保育者の話を熱心に聴く姿はそれ自体が尊く、その純粋な心は子どもたちに必ず伝わっているだろうと強く感じました。そして子どもの話をする保育者たちからは自然と「いのちの輝き」が感じられました。キリスト教保育に携わる私たちに与えられた使命は、子どもにすでに備わっている「いのちの輝き」を引きだし、育くむことですが、まずは自分自身が神様から愛されていることに気づき、自らのいのちを輝かせることが大切なのかもしれません。

今、新しい保育園が次々とでき、それ自体は社会にとって必要なことではありますが、子どもにとって本当に必要なのは、愛をもった保育者のいる、愛が溢れる保育園です。そんな園が増えることを心から願います。

試行錯誤を繰り返しながらも温かなまなざしを子どもたちに注いでいる保育者たちは、今日もキラキラと輝いています。

オリーブ保育園
主任　**矢野　久美**